
彼の私と 5 年前の私

タジャドルコンボ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼の私と5年前の私

【Nコード】

N1327Y

【作者名】

タジャドルコンボ

【あらすじ】

5年前私はあの出来事を忘れていたけれど、彼と再会？したことでその記憶が思い出してくる。これは5年前あの地獄のような出来事である

いつもの日常5年前の出来事とはじまりと(前書き)

あまり上手ではないのでご承知ください

いつもの日常5年前の出来事とはじまりと

彼は今どうしているのだろうか。5年前にある男とであった。私は当時11歳だった。当時そこに何があるのかはわからなかったけれど、危険なものであり、ここにはいけないとわかった。そして私にはそのあと記憶が抜かれていた。覚えていることは5年前にあった彼のことともう1つの世界。そしてもう1人の私だ。

そんなことも忘れて私は16歳となっていた。現在高校2年生の女の子です。取り立てて個性というのはないと思う。今までに何かに打ち込めるといった機会がなかったから私には将来のことなんて考えていない。まだ先と思っていたが、周りにはもう大学だとか就職だとか夢や希望を持ってそれぞれ生きているって感じかな。

「私って何のために生まれてきたんだろ」

「難しいこというね、でもうちはそうだな、生まれてきたのは佳奈と会うためだと思うよ」

彼女の名前は相沢美希ちゃん。あいざわ みきちなみに私の名前は宮本佳奈です。みやもと かなって現在彼女と町をぶらぶらとまわっていたということなのですが、さすがに私も彼女もやることなく近くのアースストリートに入ったわけだけど、本当にまだ帰りたくないな。

私の家は父が1人母は現在ローマだったかな。音楽家なのである。その3人家族である。

「暇だね、ってあれ健二君じゃない？」

「ああ塾の帰りかなんかかな、大変だね」

塾ね、うちはお金ないからそういうの無理だな。まあ別に面倒だからの言い訳に過ぎないんだけどね。

「じゃあ帰ろうか」

「うわあ、もうこんな時間じゃん。やばいって、うちの家には今ダイゴロウが庭に穴掘って埋めなきゃならんの忘れてたよ。じゃあ

ね」

「うん、がんばってね」

まさかそれが彼女との最後の会話だとはこのとき思わなかった。と一人とぼとぼ歩いていたら私はいつの間にかベンチで寝ていた。

「え、なんで？ 私なんでこんなところにいるの」

「よお、ようやく起きたな」

聞き覚えのあるようなないような声が聞こえた。てか男性の声かな。なにになに私、なんかされちゃったわけ？ というよりも突っ込みたいことはひとつあった。

「ここどこー」

「おいおい、そんなに騒ぐなよ。やつらに気づかれるって」

「あなた誰ですか？」と聞いてみたら

「あれ？ 覚えてない？ 俺だよ、ったく最近の若者は忘れっぽいんだな。俺は5年前のあの事件でお前に会ったはずなんだか」

ああまた5年前のことか、忘れられた時間だなそれは。

「仕方ないな、痛くも怖くもねえからちょっと待ってろ」

と彼は私のおでこに人差し指を突き出した。

「今から全部思い出してやるよ」

っと私の頭にはあるものが見えてきた。

5年前当時私が11歳

まだ私の背中には赤いランドセルが似合っていたときだった

「帰ったら♪手を洗って♪うがいごっくん!! のもと♪」

といいながら歩いていたら。なにやら何かを感じたような気配に陥った。そして…

ウー

とばかりでかい警報機になった。一体何があったのか当時の私にはさっぱりわからなかった。

そして空の色は一気に暗くなった。そう世界の破滅が始まったの

「たすけてくれええええええ」

「死にたくねえええええ」

「きやあああああああああ」

私は怖くて怖く寝泣き叫びしかなかった。そう何が起こったかという、世界は悪魔みたいな種族。

古代からの破壊者、閥族の侵略が始まったのである。

ある男の回想

「ちつくしよお、始まつちまつたか」

そう2012年俺達の世界は崩壊するということは本当だった。

そしてその予言は俺は知っていた。

『世界は闇に包まれて滅び去る』ということが昔からの言い伝えだった。

「俺には何かできることはないのか。俺に力があれば、くっそお

仕方がないさ、俺はまだ20歳、年は関係ないのだが、閻族を倒せるのは、巫女みこしかもそれも特別な女子が必要だということだ。俺はこの10年間探し続けたが、見つけることはできなかった。

「火があつちまで広がってる。これが俺の町だって言われても信じられねえ」

なんとかしないと、いったん家に戻ってなんとかするしかねえ。護身用ではあるけれど、何とかこいつら倒せ。そんな武器はある。今戻れば何とかなるかもしれない。けれど、

「今戻るには、あの地獄を通らなくいちやならんのか」

そこは閨族が広がっていて、地獄のようだった。

「なんとかして帰らないと死んじまうな、行くしかねえな」

俺は火の間をくぐっていった。

私の回想

「うええええ、お父さん、お母さん。助けてよ」

私には何が起ったのかさっぱりわからなかった。このときまでには私の記憶があった。

「ここどこ？、いやああああああ、こっちこないでよおおお」

そののへんてこな化け物が私に迫ってきた

「こないで、こないでよおおおおお」

そのとき化け物は警戒したかのように去っていった。

ある男の回想

「くそお、こっちまでいやがるぜ、くせえな、まったく町は全滅だな」

まるで生き地獄だぜ。参ったな。こりゃ巫女までもが死んじまってるかもしれないか。俺に後でできることといったら、滅び去っていく世界を見るだけしかないか、はかない人生だったけれど、楽しかったかな。巫女探して 精一杯だったけど。俺は満足だな。もう終わった。でもそれでも最後までやることやってから、死ぬ。それが俺 の家のルールだ。

「あぶねえ、ええええええ」

危なかった。もう少しで建物の下敷きになるところだったぜ。俺は冷や汗をかきまくっていた。

そして俺は運命的な出会いにあったのだ。

そう10歳くらいの女の子とだった。そうその女の子とは、最悪な出会いだった。なぜなら女の子は閼族に襲われそうになっていた。

「くそお、俺に力があれば」

「こないでよおおおおお」

「ごめんね」

でも不思議な事が起こった。

「閼族が去ってる。なんでだ？まさか」

私の回想

私は何かが去ってほっとしておいた。だけどあっちから何かがつちにやってきていた。

「またあ、いあっややあやっやあああああ、もうこないだよもういやだよ」

本当に泣きまくっていた。女の子なのになんて無様な顔だったのだろうと思っている。今となっては恥ずかしい。それがからとの出会いだったからだ。

「君、大丈夫だった？ けがないかな」

ある男の人が歩み寄ってきてくれた。

「だいじょぶれす」

泣き声で言ったので、彼は少し笑った。

「じゃあ、ここは危ない。あっち行こうか」

「あっはい、えっと」

「俺のことはそうだな、イケメンお兄さんでいいよ」

彼はバカじゃないのかと思った。こんな状況でボケている場合ではないのに、彼は今笑っていた。たぶん20歳くらいだと思う。なぜか今私はほっとしている。

「じゃあ変態さんで」

と子供が最近覚えたよ、といった言葉で言った。

「すまんそれは完全に落ち込むわ」

そうやって私は笑ってられた。安心があったからだ。

「俺も少しは力を使えるんだけどな」

「力？」

「超能力みたいなもんだな、まあ君とは違うけどな」

私は彼がいつている言葉はわからなかったけれど、うんうんと笑顔でいられた。

と走っていると、急に立ち止まった。

「なんですか？ ここはどこですか？」

「やっとなついたよ。ここは俺の家だ。さあ早くして！」

「ふえ？」

意味がわからず、なんか1つの部屋に入った。中央にはなんか勾玉みたいなものがあった。なんだろうかなって 思った。いろいろあり、赤に青、黄色と白まであった。

「きれい」

「おまたせ、早くこれに着替えて、早くいいからさ」

「え、わかりました」

と、よく神社にいる巫女さんだったかな、そんな衣装だった。

「おっと、その前にどれが君の勾玉、いやパートナーか、確かめないかね」

彼が言ってることは独り言なんだろうか？

「お、どうやら赤だね、赤の巫女か」

「赤ですか」私黄色がよかったな。きれいだし。好きだし。

「うん、じゃあこの赤いやつに着替えて、急がないと被害が出る。ここならまだ被害は受けないけど、いそがな いと大変なことになっってしまう、だからさ早く」

私はあることに気がついた。

「どうしたの？早く着替えて」

「あの、そこにいられたら、着替えられないんですけど」

「あ、ごめん」

… … …

「着替え終わりました」

「おお、じゃあいこうか、えっと赤の巫女”レッドミデアム”かな、確か赤い巫女はそう呼ばれていたはずだ」

それは名前に私はいやだ。小学生の私が抱いたものだった。

「普通に名前をお願いします」

「そういえば名前なんだっけ、聞いてなかったよ」

「私は宮本佳奈みやもと かなです」

そういつて私はこの男に家からでて、再びあの地獄へと出陣していった。何のためなのかわからなかった。だって普通に考えたら、

あのような危ない場所で、しかもこんなコスプレでどうしようというのだ。華麗に死にたいのならわかるけれど、これはなんでも意味が不明だった。

「あの、なんでこんな衣装に着替えなくてはならなかったのしょうか？」

「ああ、戦闘服だよ！」なら意味ないじゃないですかー！！まあそんなことはどうでもいいとして、なぜ私はこの人にしかも走って、あの地獄げと行っているのかわからない。助けるなら、あの家でかくまってくればよかったのに。小学生の頭では考えられなかった。

「着いたよ。疲れたでしょう、はいお水ね」

飲みかけではなかった。いつ買ったのだろう。自販機はどこほぼ全滅で、しかも生きてても飲めそうではなかった。後で聞いたら家から持ってきたらしい。私が着替えているときに準備した時に取ったらしい。

「それにしても、この衣装最初はサイズ合わないと思いましたけれど、今ではぴったりですね」

「ああ、服自体に靈気みたいなものがあって、まあ意思があるってって言った方がいいかな。まあ生きてるってことだよ。そいつが君に合わせてサイズを合わせてくれるんだよ。まあ成長に合わせて徐々に変わっていくから死ぬまでは着れるね」と最後は満面の笑みで言った。

「まあ一番成長しなくちゃならないのは…」とこの男は私の胸に目がロックオン！していた。

「どこ見てるんですか！変態！！！」

いったい何やってんだろうな私は、いろいろ知らなくてならなかったと思う。家族のこととか友達のことだ。どうやっているのか知らなくてはならないだろうけど、今私は変なことをしていた。そう、私は

「んっと、勾玉になんで念じなくてはならないんですか？」

勾玉に必死に念じていた。なんだかよくわからない。

「まあ、まだ初見だからな。まずは力を入れなきゃ稼働せんだろうからな」

自販機ですかこれは、

「もういいと思うけど、あんまり時間もないしね。さあて術を唱えてもらおうか」

「術？」

「そう、巫女は術を唱えて攻撃するんだ。まあ赤い巫女のレッドミデアムは主に火とかそういったのが多いかな。君結構見た感じではまだ力は未熟だと思うんだ。あと5年くらいだとかなり強い力が使えるけどね。でも君の力は強いよ。でもコントロールはできないから俺も一緒に安定させてやるよ。最大の一発でする術があるんだけどね。でも少し危険なんだよな」

少々この人の独り言聞いていた。ちょっと疲れた。まあ大体わかったけれど、大幅理解不能だった。

「危険なんですか？」

「うんまあ、あれだ。すこーし記憶が飛ぶかな。うつすらとは残るんだけど」

「記憶ですか、どこら辺くらいまで？」

「どうかな、結構衝撃高いから、その術はね、あったことをなかったことにするんだ。年に1回しか出せないけどね（笑）」

うーん、まあいいかな。こんな地獄なんて記憶消したかったし、この男の記憶も

「そういえば、名前なんですか？」

「俺？ああそういえば言ってなかったな、俺の名前はうーん、イケメンさんで」

変態さんと憶えて起きましょう。

「さあいくぜ、もう力は充電完了だからな」

「はい、って術ってどうやって唱えるんですか？」

「えっとね。この勾玉に言葉、いや心で唱えるんだ。巫女の力の

源は心だから、その術の名前は”オールデリート” そんなまだな」
まったくそのままだけれど、彼はこう言った。

「消したいものを心に思うんだ。記憶でもなんで、まあやつら、
閻族とか死んだ人が死んだこと自体消えることもできるからな」そ
れは巫女にしかできないことだよ。と言っていた。

さあて、やろうかと準備は万端っていうことで体制をとっていた。
「じゃあいくよ、早く唱えて！」

周りのぞろぞろと閻族が増えてきた。彼が言うのも無理はない。
でもひとつ唱えられなかった原因があった。

「少し唱えるのが怖いんですけど」

そりゃ小学生にこんなこと怖すぎでないだろうか。今から何が起
こるかわからないのに、

「大丈夫だ。俺がいるから怖くないだろ、あと心配すんな。そこ
まで不安な術じゃないからさ、力をこめるんだ！」

「はい！」なんとなくホッとした。

「じゃあ唱えますね」

「いつでもどうぞ」勾玉が光っていた。もう出せるっていう合図
だろう。なんかこの勾玉が生きているって言っていたことが本当だ
った。生きているぬくもりが感じられていた。

「”オールデリート”」

この術を唱えて、私がいたのは病院だった。っで近くに家族、お
父さんお母さんにお兄ちゃんと妹がいた。

「私はいったい何が」とさっきの出来事が頭によぎった。そうだ
私はこの世界を救ったんだ。じゃあ彼はどこにいったんだろうか。
っとちよっと記憶が薄れていた。

そして5年後の16歳である。

「どうだ？思い出したろ」

っとさっきの続きである。

「あああのときの変態さんか」

そこが一番思い出せた。そういえば今でもこの人の本名知らないことになる。

「ひどいなく久々の対面なのにさ。まあいいや。それにしても佳奈も大きくなったな、俺が希望していた胸は大きくなってないけど」とこの変態をおもいっきり殴った。

「いってゝ女はおっかないな」と笑って言った。ふざけてんのかこの変態は

「っで今頃なんで私の前に現れたの？」

そこが一番聞きたかったことで、そしてまたあんなことが怒らないかという不安で聞いた。

「まあ、俺はまだ戦ってるのさ、やつらと、っで君に力になってもらいたいんだけどさ、いいかな？」

まだこのバカは戦っていたのだ。しかも力がないくせに、でも私はこう言った。

「いやだ、今頃現れてその台詞？ 大体あんたのこともよく知らないし。それに私高校生だから忙しいんだから！！」最後は嘘である。めっちゃ暇です。

まあ目の前にいる変態さんも結構この言葉には重かったようだ、しょんぼりした顔でずっとそこに立ち止まっていた。そして何か言いたそうであった。

「いいたいことがあれば言えば？」

「ん、ああ」もったいぶって、溜めた感じでいた。そして少しイライラしてきた。この人いつもはつきり言うからかな。まあ全然初対面くらいな関係だから知らないけど。

「まあ、その気がないならいいさ、他の巫女探すよ」

「まだ探してるの？」

「ああ、まあお前しか見つかってないけどな。じゃあなレッドミデアム」

懐かしい名前と言われたからかな。このとき黙ってこの変態の背中を眺めていればよかったのかもしれない、だけど今、じっとはし

ていられなかった。

「よかったら手伝おうか、闇族倒しと巫女探し」

「本当！嘘じゃないよね！！」

ぱっと明るい顔で顔を近づいてきた、正直きもい。

「本当だってば、その代わり本名教えてよ」

「ああいいぜ、いやゝうれしいな、俺は大道賢吾^{だいどうけんご}だ、よろしくな

佳奈」

こうして私の変な関係と戦いが始まったのだ。

いつもの日常5年前の出来事とはじまりと（後書き）

見てくれてありがとうございました

これからが始まり（前書き）

まったく上手くはないですが見てくれた人には感謝します。
本当にありがとうございます。
ではごゆっくり拝見してください

これからが始まり

この町、橘町は人口おおよそ1万人くらいのよくある田舎で、やたら大きな駐車場のあるショッピングセンターに、小学校と中学校がまあ合わせると10くらいでときどき、対抗戦みたいなやつもやっていて、地区大会とかなら絶対顔を合わせることが多い、ここ十年くらいでかなり店とかが増えてきたいわゆる今時の町である。

「つでなんでポップコーン？」

「うまいよ、食うか？」

いらないって、そんな汚い食いかたしていたら。彼はポップコーンを手にどっさり掴んで舐めまわすように食べていた。正直汚い…。つと、前回のあらすじをいうと、私はこの男、ついさっき聞いた名前。大道賢吾から私の5年前の記憶を思い出してくれた。そして再び私はこの男との戦いが始まるらしんですけど、正直言って今どこに向かっているかがわかりません。

「あのさ、どこ行ってるわけ？」

「さっきから質問ばっかだよな、まあいいけどさ、これから俺んちに行ってもらうよ。いろいろ準備するものがあるしさ。」なんて事前に用意しなかったんだろう。

思えば、さっき友達を離れて何時間経ったのだろうか。てか今何時すらわかんないし、ここがどこだかもわからない。高校生16歳の女の子が、5年経ってるから25歳だっけ、そんな男と歩いてるって、絶対なんか誤解されそうで怖い。こんなタイミングで警察でも来たら…

「お、警察だ」何なのこのタイミングは！！

その警官は何も言わないですつと通り過ぎていった。まあ当たり前だけどね。カップルと思われなかっただろう。私この人よく知らないし、まあ兄妹って見られていたとしたら、なんかそれはそれでいやだ。

「さて、疲れたからタクシーでも使おうぜ」

「なんで今まで使わなかったの！！！」いままで歩いてた無駄な時間を返してよ。ねえ、30分くらい歩いてたよね。なんでここでタクシー使うかな。

「お前と歩くと、兄妹って思われそうで、なんかいやだ」それ私の台詞なんですけど。微妙に笑ってるし…、もう帰ろうかと思ったけど、さっきあんなこと言っちゃったからしょうがないか。

っとおとなしくタクシーに乗った私は10分くらいで大道こいっの家に到着した。

家は5年前と比べて新しくなっていた。というよりも外装とかは変わってなくて、なんだろ新しさが感じられた。というのもあの時は真っ暗で、何色など外装など覚えてはいない。

「さてと、まあ上がってよ」と広い玄関にいた。なんか中は和風でもなく洋風でもなくまあ普通だった。マジで普通だった。

「お、お邪魔します」とかたくなに緊張している風に見せた。なんでかって？こうしておいたらボケがこないからである。

「さてと、まあゆっくりしてって」

「あ、はい」

「お茶とかとってくるな、お茶でいいか？それともなんか」と気を使ってくれた。

「なら、お茶でいいです。あ、そこまで気を使わなくても結構です」睡眠薬飲まされそうだ。

「OK OK、なら待っててくれよ」

と待たされたところは、茶室というよりなんだろお客様をもてなすところな部屋だった。畳のいい香りがした。暇だったから部屋の中を見て回った。失礼すぎるやつだな私。

5分位して返ってきた。麦茶だった。

「他の人とかは？ご家族とか」

「ああ、ここは俺の家だよ」

「はい？」どういうこと

「だから、ここ俺の家ってこと、まあ家賃とかそういった難しいことは親に頼んでるんだけど、まあいわゆる1人暮らしってことかな」

なんたるブルジョワ人だ。こんなでかい家で一人暮らしで？しかもいやは超裕福っでことですか。通りで巫女探しとか悠々にできたわけだ。待ってよ、ということは今この家には私とこの変態しかいないわけで。：私が危ないなこれは、そっこう逃げなくては、どんな目に合わされるか。わかったようなもんじゃない。

「何帰ろうとしてんの？大丈夫だ。ちゃんとメイドさんもいるし、そんなちんちくりんに手は出さないっての」

「まるで私が何を考えていたかわかったような言い草ですね」

「まあ、馬鹿の考えることはすぐわかるからね」

今馬鹿って言いました？この男にだけは言われたくはなかった台詞の中で第2位である。

「ふんだ。この前にテストなんか300人中196番だったんだから」

我ながら中途半端な点数だな。自慢にもならなかった。でもこの男はこういった。

「ぷっふ、お前そんなんでそく自慢できるな。まあ俺よりはいいじゃん。俺は100人中76だしさ」100人中ということは3かけて228かあ、まあ下だね。

「確かに頭悪そうだもんね」

「でも学校はお前その制服松高だろ、松本高等学校、あそこ馬鹿高だろ！」

ならあんたはどこ高だよ！松高なめんな！

「俺？宇土高だよ、宇土冥団大学高等学校だよ。どうだ」
負けたあそこは偏差値めっちゃくちゃ高いんだっけ。よく受かったなこの変態。とこんな話をしている場合じゃなかった。

「じゃあ本題いってよ」

「ああいいぜ、というかお前が話し振ってきただろうが」

あれ？そうだったっけ、まあいいや

「いいから続けてよ」

「ああ、まだ本題言っていないんだけど。まあ5年前のような儀式とは違って。本契約みたいなもんだ。まあいわゆるこの力を受け継いでもらうものかな」

「っで何をすればいいの？」と可愛く見せようと首をかしげて目をきらり〜ん、特に意味はない

「ああ、この勾玉ね。はいお前のやつ」

5年前から何も変わっていなかったこの勾玉はまたこの感触がしていた。『生きている』と、

「あと巫女の衣装なんだけど、あれじゃないと力は本当には発揮できないんだよね。あれもさ一応生きてるし」

それは5年前の感じました。生きているという感じはよく伝わった。あの赤い衣装結構可愛いんだよね。

「じゃあちよつと脱いで」と真剣に言った。逆にきもかった、だから殴った。

「痛いじゃないか、この貧乳が」

「貧は貧でも気品の品だ。ばーか」ともう一発殴ろうとしたらとしたら止められた。

「違うっつの、儀式だよ。ちゃんとしたね。ああ、俺見ないからさ、さっさとやっちまえよ。儀式したら。戦闘服である巫女服も術で着れるようになるからさ」

その機能、学校行くときに欲しいな、術を唱えられるだけで、着替えができて遅刻はしない。これって便利だよな。

「変な妄想してないで、早くやれよ。ほら見てないからさ」

別に疑ってるわけじゃないんだけどさ。こいつに見られてもなんの得にもならない。そして脱いでいった。まあ現在ほぼ全裸ですよ。恥ずかしすぎるっつの

「っでどうすればいいの」

「勾玉に念じろ。そうすりゃ契約完了だ」

「わかったやってみる」

そして勾玉に念じてみた。

(こんにちは勾玉さん)

（はい、私はあなたのパートナーの赤の勾玉です）

（話せるんですか！？）

（はい、5年ぶりですね、契約すれば自然と内緒話可能です）とこの勾玉はおとりした性格だった。赤の勾玉なら情熱系かなと思っていたが、まあいいやどうでも

（契約ってどうすればいいんですか？）

（簡単です。私の言うことにただうんといえいいことですよ）

（では、はじめますね。以下宮本佳奈は赤の巫女としての力を受け継ぎ、そして私とともに戦うことを志、そしてこの力をいい方向に導くことを誓えますか？）

(うん 誓うよ、そのために今ここにいるんだもん)

（契約完了です。話したいときはいつでも念じてくださいね、佳奈、これからもよろしくね）

（こちらこそ、赤い勾玉もよろしくね）

（アカマガで結構です）

なんという略し方なんだろう、まあ呼びやすいからいいけど

(じゃあ、改めて、アカマガちゃん、よろしくね)

(はい)

と私は契約完了した。

「お、契約完了したか」と変態がこっちを向いた。

もちろん私は全裸だった。

「こんの変態がああああああああああ……！！！！！！！！」

!!!

変態をかなり殴っていた。

「というかお前服着ろ服を」

「ああ、うん」 少々というよりもかなり恥ずかしかった。

と、ようやく着替えた。

「今日はすまんかった」と賢吾は謝っていた。

「まあいいけど」つーんとした顔で言った。そして私はタクシーに乗っていた。この男が呼んだのだ。遅くなったから、

「これタクシー代な、ああ返さなくていいから」といかにもお金持ちの台詞をはいた。

と私は無事に家に帰った。

「今何時だと思うんだ？」

その後お父さんに怒られた。帰ったのは8時前だった。高校生だからいいじゃん。ということはできなかった。もちろん今日あったことは秘密で、言い訳は、カラオケして、ゲーセンいったらいつの間にか寝ていて遅くなった。といってごまかした。

翌日、登校したら。友達的美希が欠席だった。聞いたら

「美希、行方不明らしい、まあ詳しいことはわからんが、知っているやつがいいたら教えてくれ、最後にお前が一緒にいたんだろ」と先生に昼呼び出された。

行方がわからなくなったのは、私とはぐれてすぐで、ちょうどそのとき、大道賢吾と話していたときだった。

「わかったことがあれば教えてくれよ、お前が頼りだぞ佳奈！」

この男教師は^{ぜんこく}全国先生といって変わった名前である。よく生徒を名前で呼ぶ変わった先生だが。人気はあった。私はあまり好きではないけど、こういうタイプ。

とりあえず「はい、わかりました」とだけ言っておいた。といか^{ぜんこく}全国先生っていつからいたっけ：

それからすぐに彼の元に行った。なんでかって？それは

「教えてよ閨族のこと」

「ああ？いいけど、何？やる気出てきた？」

「まあ、なんとなく」とごまかすように言った。本当はもしかしたらでよかった。

「じゃあ、基本的なことからだな、闇族って言うのは簡単に言えば人を抹殺する殺人兵团なんだけど、まあ実は宇宙からの侵略者でもあるんだよね。古代に眠っていたはずなんだけど、それも期限が5年前のあの日についたみたいで、それがいつせいに開放したってことかな、今はあのとき”オールデリート”の完全抹消でなかったことになって、なんとか俺達が時間稼いで、徐々にだけど開放しちゃったんだよね。それでまた巫女探ししてるんだけどね。ああ話しずれちゃったな」

わたしは「はい」とか「ああ」とか「はあ」とかしか言わなかった。で続き

「っで闇族に殺された人間は遺体は残らない。抹消というよりも存在そのものが消えてなくなってしまうんだ。人々からその人に記憶が消えてしまうんだ。殺されるところを見た人間以外ね。闇族はその存在をエネルギーにして自らのなんというか、力にしたりするんだ。あと傷の手当とかもそうだな」

「人間が殺されずに、何かの目的で誘拐してるってことってあるかな？」

そう私は美希みきが関係しているのではないかと考えた。まだ人々から記憶があるってことは殺されてはいないことになっている。

「そうだな。ないともいえないな。でも実例がないからなく、俺もそこは言えないな、でもそんな賢いやつもいるかもしれないな。あいつら俺ら人間と同じで脳みたいなやつもってて進化することができるからさ。これまたやっかいなんだけどね」

っど話は流れて、最終的には彼の闇族との戦いのエピソードを長々聞かされた。ほとんど逃げている話が多かった。

「っでまあそういうことだな」

といわれても自分の体験話聞かせても説明部分は前半だけだったれども：

「大変だったんですね」

いつこの人が死んでもおかしくはない状態だったということだけ

はわかった。私は何もとりえない女の子だったけれど、何か彼のためにできると思うと楽しくなってきた。こんな気持ちは初めてだ。わくわくしたような気持ちだった。

「ああまた明日な」明日って…、私またここに来なくちゃならないの？今日は用というか聞きたいことがあったから来たんだけどなく、まあいいかな。

次の日

全国先生も何も言わなかった。そして、クラスの誰もが誰か死んだ何て覚えてはいなかった。一番衝撃的だったことは、靴箱の名前と机が変わっていた。そこには私の知らない子がいた。一瞬転校生かと思ったけれど、最初からいたらしい。名簿も4月からになっていた。

「闇族によって死んだ人間って存在そのものが消えるんだよね」

ならなんで私には美希に記憶が残ってるんだろう。

には記憶は残るさ、巫女みこって言うのは特別な存在だから、別に死ぬ
とこと見なくても記憶にはちゃんと残るようになってるんだ。そう
いう力だからさ。だからお前は5年前の記憶がぼんやりだったけれ
どあったじゃねーか」

「うわあああああああああああああああああああああ
ああああああああ」

叫んだ。あんなに一緒だった。美希みきが閻族によって殺されたのだ。

しかも覚えてるのは私だけ、状況がわかって初めて、死というものを実感すると怖くて、泣き叫ぶくらい悲しくて、自分には力があるのに守れなかった自分が悔しかった。

「おい、大丈夫か？ほれハンカチ、ってこれポケットティッシュだ。まあいいや、はい」

私はティッシュで涙を拭き、鼻をかんだ。

「泣きたい気持ちはわかるけれどさ、ちょっと状況説明してくれないか？」

私は彼に、今ある状況を説明した。泣きながら

「なるほどな、それはおそらく閻族だな、おそらくお前と別れたときに襲われたに違いないな」

真剣に考えてくれていると少し安心した。まあ真顔が俺は真剣に考えてるぜ！って感じだった。私この人基本見下してるからこのときは少し感心した。

「じゃあちよつとあれ使ってみるか」

「あれって？」

「んっーとなく、ある意味探索機かな」

「探索機？」

それは5年前に入った部屋の奥の方にあった部屋にあった。

「私たちの県内じゃないですか」

私は目を見張った。PC上に地図の機能は知っていたけれど、明らかに違っていた。本当に探索機だった。

「俺がソフト使って作っただけだけど、昔までは人雇って調査してたんだけど、こっちの方がお得なんだね」

「そういえばあなたはお金持ちでしたね」

「じゃー見つけてみるけれど、やっぱり反応しないな」

「なんで？」

「そりゃ普段は隠れてるからさ、人間に化けてるからね」

「あー」

そういえば薄っすらだけれど、この人から、「閻族は人に化けて

生活してるんだ。目印は腹とかへその近くに闇って書いてあるんだけれどね。ほら俺にはない、君にもないでしょ」っと腹を見せてきて、私を脱がそうとした。もちろん殴ったけれど。

「でも、闇族も24時間闇族も化けれるわけじゃない。そりゃ力を使ってるんだから、疲れが出る。それがこのPCにセンサーとしてでてくるってわけなんだよ。何回もこれで感知してるんだぜ。」って出動しては逃げていたってことですか。

「じゃあさ私が、町にでてればいいじゃん」

「まあそうだな、連絡手段として、携帯はあるか？」

一応高校生だからあるんだけど…、と仕方なく彼にメルアド教えた。不覚だった。ああいやいや、いやだ。気分悪いな。でも仕方ないか。

「じゃあ1時間位したら戻るね」

「ああ、俺も発見できたら連絡するな」

思ったけれど、あんなマシン作って、町を監視してるって犯罪じゃないのだろうか？このこと私はまだ彼がこの町を仕切っている人の子供が彼とは知らなかった。としてもプライバシーというものが人それぞれに存在するから…、面倒だから今度にすることにした。

という訳で町に出た。って何もすることがないから、

「暇だな」とコンビニで立ち読みしていた。まあいわゆるサボリというか、歩いていてもつまらなかったそれだけだからね。サボリじゃないからね！！

というか、巫女だから感知はできないのだろうか？勾玉のなんだったけー、えっとアカマガだ！

（巫女って感知できないの？）

と念じてみた。

（ああ感知ね、時々いるけれど、それは感知タイプと言って特殊な人しか使えないのよ（例えば霊感がある人が多いかな））と相変わらずゆっくりと話す御人だこと。まあ落ち着けるところがすごいけど。

（わかった。ありがとうねアカマガ！）

（はい、また話しかけてくださいね、じゃあ寝ますねおやすみなさい）

おいおい、まだ夜じゃないですよー、昼寝ですか？

という訳で何もなく無駄な時間を過ごした。

「はあ、まあ今日はこんなもんだろうな、じゃあまた明日な」

「うんまた明日ね」

いろいろ知った日だったな。昨日よりは少なかったけれど。最近何かと疲れる。そこまで疲れることではないけれど、体力面ではね。精神的に来るものはあったから、親友というかまあ親友の死とか再会する彼とか、最近いろいろ疲れる。これから私はどうなってしまうのだろうか。その不安もあってか疲れていた。っでこんなことが

「佳奈さーあんた彼氏とかできた？」とお母さんが言った。と言っても現在パリで仕事しているのでテレビ電話でのパソコン上で会話していた。まあお父さんは風呂に入っていてまだでてこない。まあ風呂では音楽聴いてるし、上がったら上がったでそのままビールをおつまみと一緒に自室でテレビを見ながら飲むのがお父さんの1日の一番楽しみな時間。そして私がお母さんと話せる時間でもある。

「いないよ彼氏なんて」

「だって最近帰りがいつもより遅いらしいじゃない、それに最近ため息とか多くなった。とか携帯をよく見るようになったとかお父さんが言ってたわよ。泣きながら」あの父はどれだけ娘がすきなんだ。

「まあいろいろね」

「な〜に？隠し事？あんただでさえ友達作れないんだから、まあ心配はしないけどさ。お父さんあんまり泣かせないでよ。超心細い人なんだからさ」

それはわかっているよ。17年も一緒だからね。

「うん。ところでさ、次はいつ帰ってこれる？」

「うーんとね…」そんなことがあった。

最近帰りが遅い理由は、彼（彼といってももちろん彼氏ではない）、大道賢吾のどこに行ってるからだ。

っで今も、

「闇族見つかった？」

「いや、昨日から全然反応がない」

それはおかしいとのこと。大抵1日に1回は反応があるらしい。

「どこかこの町から離れたところから姿をくらませてるのかもな。まあ一応そっちも調べたが、行くにしても車で30分くらいあるところだ。」

そうだったら帰る時間が遅くなり、まあ終いには外室禁止を受けるかもしれないことになってしまう。」

「まあ一応行ってみる？」でも見過ごしてはおけなかった。

そしたら

「あ、反応だ！」

PC上に緑のランプらしきものが光っていた。

「近いぞ、ここから徒歩で5分くらいのコンビニから右に行ったら駅で列車に乗ってすぐのそこだ」

どこやねん

「あれ？ギャグ通じない？まあいいや、そのコンビニだよ。このデータをこっちにノートの方に移してっと、よしいくぞ、”赤い巫女”さん」

5年前のあの走った記憶が思い出す。彼と走ったあの道のこと、忘れない。あの怖すぎた道のことは。

「あれ？おかしいな。コンビニに反応があったんだがな」

っと5分でコンビニについていた。するとコンビニに全国先生の姿があった。なにしてたかという、本コーナーでエロ本の立ち読みを堂々としていた。

「俺はこっち行くからさ、何かあったら携帯で。お前はここに残ってくれ。ああコンビニであの変態やろうのどこに行ってもいいぜ」

と賢吾さんは全国先生を指差した。

「はいはいわかったからさっさと行っちゃってよ」

「気をつけろよ」

そっちもね。ただ逃げるだけだろうけどね。

と私はコンビに入った。まあ全国先生はあまり好きではなかった
ので、からかおうとまあ悪い生徒ですいませんね。

「せーんせー、こんにちは、偶然ですね。何読んでるんですか？」

「うわって、ああ佳奈か」

あいからわらず生徒を呼び捨てて呼ぶんですね。名前を。でも親
しみやすさで結構評判いいからまあいいかな。

「はい、立ち読みですか？」

「ま、まあな、ははは」とエロ本を後ろに隠した。でもコーナー
の前にいるのでバレバレである。

つで一息ついて先生はこう言った。

「いいか、佳奈！先生も男だ」

わけのわからないことを言い出した。

「だから私もここでエロ本を立ち読みしている。わかるな」

わからないよ。何で買わないの？てか私を襲うんですか？それで
わからないままで

「はいわかりました」

「おまえわかってないだろ」

何で先生がこんなこと言ったかと言うと、私が携帯で写真をエロ
本コーナーにいる前にいる先生を撮ろうとしていたからだ。

「はい、堂々とエロ本を立ちよみしている先生を撮って、それで
Web配信すればいいんですよね？」

もちろんわざと言ってます。毎回宿題多いんだもん。たまには仕
返ししても悪くはあるまい。

「やめろってもう」

「ははは」

完全先生をなめていた。そのときだった。

「そういえば君は親友であつた美希ちゃんのことはどうでもいいのかな？」

はい？何で先生が知ってるの？でもそれより先生いじくるのが楽しかった。だからかな油断してた。

「私だよ。彼女を殺したのは、そして次は君だよ。佳奈ちゃんよ
おおおおおおおお」

ふっと我に返って先生を見た。

そしたら5年前私が襲われそうだ闇族の姿だった。そしたら携帯がなった。

「おい！今そこにいるんだろ！気をつけろ。そいつ結構やばいぞ」
「やばいって？」

まさか先生、全国先生が闇族だったなんてくらいしか今頭にはなかった。

「今そっちに向かつてる」

どこまで行ったんだかあの大道さんは、

「死んでもらおうかな、私はねー君みたいな生徒が大嫌いだね。

特に全然私に好意を持ってない生徒はね」

かなり危険な状態だった。まあコンビニの窓ガラスは割れていた。いろいろやばかった。下手すりゃ警察で御用だ。まだ今日のドラマ見てないのに。もう大道はまだなのか。

っとアカマガが話しかけてきた。念じてもないのに

（戦うしかありませんね）

（戦うって行ってもどうすればいいの？また5年前みたいにするの？）

（いいえ。即効変身です（キリッ））

（はい？）

（あれあれ？わかりませんか。言葉がわからないんですね。チェンジミデアム！！）
（なんてですか？一気にテンションが上がったみたいですよ）

（早くしないと死にますよ）

そんな話し方だと余計安心しちゃうよ、つとそこに

「おい！大丈夫か？俺が来たぜ」

「遅いよ大道！」

まったくどこまで行っただか。

彼は全身葉っぱとかいろいろ土だとかで汚れていた。本当にお金持ちの坊ちゃんなんだろうかと思ってしまうほどの格好だった。

「ミデアムチャンジだ」

あああなたも言うんですね。これも運命英語で言えばデステニーだったっけ？まあいいや

「はいはい、じゃあ”チェンジ ミデアム”」

私はあの赤い巫女へと衣装が変わってしまった。つまりは

（変身完了ですね）

まあそういうことだ

「おいおい何なんだその格好は、えー？なに佳奈は俺をそんなこととしてどうしたいわけ？」

先生が壊れてきたというか本性が出てきた。正直私もこの格好でどうしたいのかさっぱりだ。

「まあここじゃなんだ。戦闘に向いてないだろう。渋滞区外はやばいぞ」

大道はそういうが、先生をどうやって他のところに誘導すればいいかがわからない

（わたしにまかせてください）

（アカマガがやってくれるの？）

（はい。少し力お借りしますね）

といってなんか感じたような気がした。

「じゃあ俺もよろしくな、戦闘初めてだろ」

とこそこそ話していたら

「おい！佳奈！俺のことは無視してんのか？先生に対してとっていい態度ではないぞ！」

今あんたただの化け物だし、最初からこいつを先生と思ってなか

ったし。

（じゃあいきます。”テレポート”）
アカマガさん。そのまんまですね…術の名前が。

つと広い場所というか

「ここどこ？」

見渡す限り山とか崖？とかなんか見たことあるようなことだった。
なぜなら大道がこう言ったからだ

「ああここは、よく特撮物では戦闘シーンで使うところだよ」
そんなところで戦うなんて、確実になんかアカマガ狙ってたんだ
ろうな。

（いいでしょここ、頭にここが浮かんだんですよ）
浮かんだら来れるんだろうか？なら通学とかいろいろ買い物とか
に便利だな。

とこんなことを考えていたら全国先生が

「おい！佳奈、きさま生徒の分際でこの俺をどこに転送しやがっ
た」キレた

正直私もなんでアカマガがここを浮かんでいたんだろうか、特撮
好きなのかな？

「あの男は相当人を殺してそうだな」

「そう見えるの？」

「いや閨族は人を殺すことでその位が変わるもんだ。おそらくあ
の教師は、生徒を殺すのが目的で学校に忍びこんでいたらしいな」
なるほどね。それでそんなくだらないことで美希は死んだんだ。
てかもう怒りじゃなくて、この教師殺さないと今度は私が狙われそ
うだ。

「おい、いちいちブツブツ言ってるじゃねーよ」

ホント、性格変わってるなー、学校とは大違いだ。例えるならネ
ットで人格変わるようなものだろうか

「こんな姿見られてはもう俺はこの町では生きていけないんでね。

死んでもらおうか。2人とも」

「おいおい殺されるのはお前だぜ!!」

と大道が足ブルブルで言った。怖いなら隠れてればいいのに

「ならやってみろおお」

先生がこっちに迫ってきた。

「おい! 佳奈俺はあっちで逃げてるからアカマガにサポートしてもらえよ」

やっぱりこの男へたれだ。まあ邪魔しなくて済むし

(アカマガ、私はどうすればいい?)

(そうですね、とりあえず暴力ですよ! 打ったり蹴ったり) なんかサポートじゃないよね。それ、転送する力あるのに

「何念じてるんだよ!」

「うわっ、危ないじゃん!」

もう少して顔に傷が付くところだった。大きな鎌見たいのつけて、あれ一番あぶないじゃん。しまつてよそれ

「おやおや、そんな程度なのか? 逃げてばかりでは話にならないじゃないか」

といってもサポートが打ったり蹴ったりしろって言っても相手は鎌だし。正直危ないでしょ。

「逃げ足は速いやつめ、でも俺は狙った獲物は逃さないタイプでね。覚悟したまえよ」

地面がめり込むくらいの一撃が何度も何度もきた。

「もう走るのつらい」

(ならそうですね)。私からの贈り物として武器を贈呈しましよ
う)

あるなら早く出してよね。そういうの。

(ではいきます。この術です・・・)

(うんわかった、じゃあ)

”全力バズーカ、略して全バカ”

そして唱えたら光が舞い降りて中から、剣がでてきた。

「なんでバズーカっていったのに、剣が？」

（あはは、私流のジョーク呪文ですよ）

呪文で私は魔法少女か！！

「そんな剣で俺が殺せるものかあ！」

ぶんぶん振ってくる鎌に剣では対抗しきれていなかった。

「このままじゃお陀仏ね」

（諦めてはいけません、まだ切り札はあります）

（それって5年前に使ったあの術？）

（それもありますが、その剣に名前をつけてください）

アカマガは何を言ってるんだろうか。まあいいか、ならこの剣の名前は・・・、そうだ！

「君はよそ見してていいのかな？そこまで君は死にたいかあああ
あ」

「この剣の名前は”全力バズーカ”だよ」

「はあ？」

（今です。この剣にすべての力を吸収させるのです）

「そんなこと言われてもどうすればいいのか、わかんないし」

「ごちゃごちゃ言ってるんじゃないよお、先生なめんじゃないよ」

もう化け物になったやつを、先生と呼べるのであろうか。

なんとか力を剣にためた。

（やはりこの子には素質があったようですね）

（なんか言った？）

（いえ別に・・・）

「おい！大丈夫か？」

っげ、何で隠れてた大道はこの場面で出てくるかな？

「おお、あの男使える。あいつは何だ？佳奈の彼氏か？」

「違います！」

「そんなこと言っていると先生誤解しちゃうな、適当に生徒にメールで写メだな。あつても君たちは死ぬから無意味だったね」

そして私はかっちーんときて

「先生うざいよ」

先生の前に剣を振りかざしていた。

「なっ・・・」

「くらいなさい！」斬フレイム」

「き、きれるうううううう」

やった？

「き・・・きさつま、このままではただで済むと思うなよ、この写メで・・・、適当にネットで・・・」

「まだ斬られたい？」

先生は半分切れた状態にいた。正直グロいかと思ったが、案外闇族から血とか出ないんだね。てか変な液体だ。白くてネバネバしていた。

「よっし、やっちまえー」

後ろから大道の声が聞こえた。ああもう何もかもうざい

「全国先生、ちょっと聞きたいんだけど」

「な、にかな」

もう怯えてるし

「美希^{みき}を殺したのは先生？」

「ああ、殺したさ」

「他に殺した人は？」

「君みたいな僕に従わない問題児さ」

私は問題児じゃないんだけどな。先生にとっては問題児ですか

「やるならやってくれ、さっきから痛くて痛くて仕方がないんだ」

闇族って案外頑丈だな。人間ならさっきの技、一撃で即死だよな

(とどめを刺す必要はありませんよ。この男はそのうち爆発します)

アカマガさん、それ特撮の見すぎです。

「いいから早く」

「はいはい、怨みもあるし、さっさととどめいくね」

「やめろ！ 罨だあ」

とどめ刺した後、大道からそんなことが聞こえた。

「なに？ 大道？」

「危険なおいがする、って後ろだ後ろ」

「後ろ？」

そこには全国先生ではなく、得体に知れない大きな化け物がいた。
およそ5メートルの怪物だ

「第二現象、闇族の切り札”死に際の化け”だ」

（やっかいですね。結構これはやばいですよ）

「第2ラウンドってことかな」

と剣を前に突き出した。

「がんばれよ」

とりあえず大道には黙っててもらいたいかな。

「じゃあ、帰ったら、何か奢ってよね」

「じゃあ飯でも奢ってやるよ」

「それは楽しみだな、でもいいや。一緒に行きたくないし」

「そりゃ残念だ」

ああやるしかないか。

（では行きますよ。最終対決です）

まったくといって、攻撃が効いてなかった。やばいんじゃないかなこれ

「どうしよう、まったく効かないし、大道はアドバイスしなくてただがんばれて言ってるだけだし」

（あはは、）とアカマガは苦笑した。

（もう一度、力をこめましょう。今度はこの剣ではなく己自身に力をこめてください）

（うん、わかった）

（そして”全力バズーカ”の本当の力を見せなさい）

「じゃあその間」

大道にちよいちよいと指で合図した。

「なんだよ、俺になんか用か？」

作戦を言っておいた。

「わかったぜ、俺は必死に逃げてやるさ」

そうおとり作戦でその間私は力をためておくのだ。そのかわり大道が死の淵まで追いやられても知らないってことだ。

「じゃあ死んでね」

「いや死にたくないんだが、まあ俺に任せとけ」

と私は今まで大道が隠れていた岩に隠れて神経を集中していた。

「おい！聞け化け物、俺がこれから相手になってやるぜ」

化け物はうめくだけだった。

「いいぜ、俺が必死に逃げてやるぜ、言っておくが俺は逃げ足だけは速いぜ。せいぜい追いついてみるよ！」

5分後、疲れた大道が捕まった。

「助けてくれ」

と力がたまった私は岩から出てきた。

（準備完了だけど大道が邪魔なんだけどさ、一緒にやっちゃっていいかな？）

（そうですね。彼には悪いですが、これが運命。彼の命日だったのですね）

「大道！」

「なんだ？早く助けてくれよー」

とそのとき私は”斬フレイム”の最大攻撃態勢に入った。

「おいおい何やってんだよ。俺を助けてくれよー」

と敵の手にいた大道はじたばたしていた。

「捕まったあんたが悪い！」

はあと大道はため息をついた。諦めたのかな？でも本当に殺すつ

もりはない。アカマガとも冗談に決まっている。ちゃんと助けるつもりだけど、いまはどうして助かるか悩んでいた。

なにか隙があればいいんだけど

（もうそのまま攻撃しちゃいましょう）

（それしかないか）

もうアカマガと決めた。大道が死なないくらいの必殺技

「くらいなさい！先生」

”斬フレイム！バーストオオオオオオオオオオオオオオオオオオ”

さっきの”斬フレイム”とは比べものにならないくらい。でかい火だった。

（やっぱりこの子はすごいわ）

アカマガが言ったことがわからず私は倒れてしまった。もう疲れた。

気が付いたときは和式の畳の上で大道の家に来ていた。

隣には大道が寝ていたというか一緒！

（あら起きたのね）

（アカマガ！これは一体）

（あなたは犯されたんですよ、というかすごいものでしたよ）

ふふふとアカマガが笑っていたところを見るとアカマガがここまで運んでくれたのだろう

幸い大道にはやけどひとつなかった。あつたといえば逃げたときの怪我だ。

「お疲れ大道、ちょっとはすごかったかも」

（まあ、キスですね）

（しないし）

（いえいえ、この場面では普通キスですよ。ほら寝ている状態で）アカマガさんがノリノリで言っていた。若い子みたいなキャピキャピ感があつた。

「まあ無事かえってこれてよかった」

その後大道が起きて、いろいろ言ってきた。

「俺になんてことをしてくれたんだ、超怖かったんだからな」
ビビリなことを主張してどうする。

「先生はもう存在していないことになっている」

翌日そのことを確認するべく職員室に

「あのすいません全国先生いませんか？」

「おいおいなんだその先生は、そんな教職いないぞ、ふざけてないでほら邪魔だよ」

本当に存在していなかったこととなっていた。

と大道家

「と言うわけだったんだよ」

あったことをそのまま話した

全国先生が消えたことを

と大道は何も表情を変えずにこう言った。

「まあこれが闇族と戦うってことだな」

これからのことと思うと正直不安だけど、アカマガがいて、大道がまあ一応入っていてくれるから今はまだ安心だ。

だがこれからが本当の戦いだった。なぜならまだ知らなかったのだ。私たちは

本当に闇族と戦うとはどういうことなのか。

そしてまだ見ない巫女ミデアムがいることを。

「あれがレッドミデアムねえ、たいして強そうじゃない子ね。クロマガ」

（ああ、だな。そこまで強い気は感じられねえ）

とクスリと大道の家の前で笑う黒い髪の少女は言っていた。私
たちは彼女の気配は気が付かなかった。

これからが始まり（後書き）

最後まで見てくれた方

本当にありがとうございます

自分の一生懸命書いているので

いいアドバイスがあるとうれしいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1327y/>

彼の私と5年前の私

2011年12月20日18時54分発行